

# ビオトープだより第18号

会員・BAより ビオトープに関する情報を提供します。

特定非営利活動法人  
日本ビオトープ協会  
<https://www.biotope.gr.jp/>

## 1. 北海道目梨泊のウミネコについて報告

個人会員 内海 千樫

北海道枝幸郡に目梨泊という漁港があります。私の知る限り道内で一番のウミネコの生息地でした。何万羽というウミネコが繁殖しておりましたが、2021年突然姿を消してしまいました。

元来岩礁は地続きではなかったのですが、港の防波堤として利用するため、港の防波堤とつなげたのです。岩礁へ続く岸壁の入り口には金網が張られ、キツネが入らないようにしてはありますが、金網を迂回して海面を泳いで侵入しているアライグマを自動撮影カメラが捉えていました。

博物館の学芸員の話によれば、複数のアライグマが繁殖地に侵入して雛や卵を襲うためだということです。特段ウミネコを復活させようという動きはありません。



目梨泊のウミネコ(2018.6.24 撮影)



同上



目梨泊港のウミネコ(2018.6.25 撮影)



目梨泊港のウミネコの親子(2018.6.25 撮影)

消えたウミネコ



目梨泊港の岩礁(2021.8.14 撮影)



同上

消えたウミネコを復元する動きは全く無い。

## 2. 「国際シンポジウム 2022」

### ～自然活用の河川と水辺再生の米国での現状と気仙地方～

北海道・東北地区委員長・主席 BA 佐竹 一秀

(一社)生態系総合研究所(一財)鹿島平和研究所の共催、日本ビオトープ協会後援の標記国際シンポジウムが2022年6月5日(日曜日)に岩手県大船渡市市民文化会館リアスホール・マルチスペースで開催され、野澤日出夫副会長、佐川憲一監事と共に参加しましたので、その報告を行います。



開催場所の大船渡、隣接の陸前高田の行政や関係者に向けて、特に「東日本大震災からの復興に向けた自然共生型の解決策」と題して、米国メリーランド州、スミソニアン環境研究所デニス・ウイグハム博士による基調講演が行われました。

このような演題でのシンポジウムにどれほどの人達が関心を持ち参加するのかとの思いがありましたが、市長、副市長、担当職員はじめ市議会議員、住民・企業など、会場に設けられた120席が満席となり、協会から持参したビオトープフォーラムのチラシ60部もあっという間に無くなり、講演後予定時間を超えた活発な質疑で、この地域の関心の深さに驚きを感じました。

講演は、米国チサピーク湾に約1,100畝の土地を所有する同研究所の生物・水質・大気・景観などの調査分析や自然復元(河川修復・雨水管理・環境再生農業・ダイナミックな生きた水辺)、公害による谷川の汚染について、砂と石とチップで谷を埋めて、その浄化機能で清浄な水の流れを取り戻した事例などが紹介された。またメリーランド州の生態系修復のための具体的な資金を含めた事例も紹介されて、以前から何度も来日して調査して来た三陸沿岸被災地の状況を踏まえた提言がなされました。



デニス・ウイグハム博士



海岸工事の各ステージでの自然修復の評価

震災後に環境を無視した沿岸部のコンクリート防潮堤により海岸のエコトーンが遮断され、沿岸海域の生態系は脆弱なものとなっています。ただ、既に出来上がってしまったことから、限られた条件の中での自然共生型の解決策が提言されていました。その中でも防潮堤の内側に「湿地」を形成させ、湿生植物や湿原土壌による水質浄化機能強化の重要性が強調されていました。また、自然修復の評価につて、市民レベルで「健全な環境」であるか否か発信すること、「健全な環境・生態系」は、きれいな水・自然と再生エネルギーを取り入れたシステム・社会（生活圏）・産業が一体となったものと捉えられていました。

メリーランド州政府自然資源省のゲイブ氏は、州内の自然修復すべき場所をモニタリングして、バイラー大学水圏センター長ライアン教授、スミソニアン研究所の専門家などと修復の的を絞り、設計施工業者の専門家により事業が進められています。今回来日した5名の講師はパートナーシップを基に一体となって自然修復に取り組んでいて、施工業者のアンダーウッドアソシエーツ社は、単に工事を受注してその通り施工するのではなく、自らも提案して設計、「健全な生態系」づくりを行っている仕組みが良く理解出来ました。

日本に於いても目標は同じですので、多くの関係する専門家の意見を集約して施主に提案して取り組みたいものです。

シンポジウム翌日は、陸前高田市の「東日本大震災津波伝承館（いわて TSUNAMI メモリアル）」及び「復興祈念公園」を視察後、震災以来支援して来た大槌町の「郷土財活用湧水エリア・ビオトープ」のミズアオイの再生状況を、大槌町町会議員でもある臼澤良一氏のご案内で視察、また断崖の下で営巣している貴重なミサゴの子育ての状況を観察することが出来ました。ご案内頂きました「ミズアオイの池をみんなで守る会」臼澤良一代表に感謝申し上げます。



東日本大震災津波伝承館と復興記念公園



郷土財活用湧水エリア・ビオトープ

下の写真は断崖約 50m 下の小さな孤島に営巣するミサゴ、頂上部に巣がありそこにはヒナもいました。以前は別の場所で営巣していたが、震災後この場所で毎年繁殖していると臼澤氏の解説がありました。協会誌 34 号の表紙を飾った、ミサゴが大きな魚をヒナに運ぶ見事な写真は、臼澤氏の作品でした。



ミサゴの営巣地